
商店街にて

誠次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

商店街にて

【著者名】

誠次郎

N5088F

【あらすじ】

結婚十年を過ぎた静子は、ひょんなことから商店街に足を運ぶことになった。そこは、いたるところでシャッターが降りた暗い洞窟のようだった。そこで静子が出会ったものとは・・・

「もうすぐ御義母さんの七回忌だわね」

静子はつちわで顔をあおぎながら夫の義雄にいった。

義雄をネクタイをしめながら、

「来週の土曜日だったな。早いもんだな」

といつた。

「そうね。ところで、今夜は遅くなるのかしら」

と静子は夫にたずねた。義雄は、まっすぐ帰るよと云いながら、ス

ーツに袖を通した。

静子は夫を送り出すと、一通り家事をすませた。それから、買い物に行く準備を始めた。

いつも静子は買い物に自転車で隣町のスーパーまで出かけていった。歩いていける範囲には商店街もあつたが、六年前に隣町に郊外型の大きなスーパーがてきてからは、もっぱらそこで買い物するのが静子の日課だった。

その日、静子は買い物の途中お金を引き出しに郵便局に寄った。自転車を郵便局横の自転車置き場に止めると、静子は郵便局のキャッシュコーナーへと向かった。

運悪くその日はATMの調子が悪いらしく、機械に差し込んだキャッシュカードが何度も戻ってきた。係りの者を呼び調べてもらつたら、カードの磁気がおかしいということらしい。

静子には良く分からなかつたが、新しくキャッシュカードを作り直す必要があるとのこと、

再作成には20分程度かかるとの話であった。

静子は「ついてないわねえ」とつぶやき、待合コーナーの席に腰を下ろすと手近に置いてあつた雑誌を読み始めた。

手に取つた雑誌には子供服の特集記事が組まれていた。色とりどり

の小さな服が写真で可愛く載っていた。

静子は小さくため息をついた。結婚して10年が経つが、静子と義雄の間に子供はいなかつた。最初は亡くなつた姑と3人暮らしで、子供を作るのを何となく遠慮していた。

姑は亡くなる前に、しきりに孫の顔を見たがつていた。それでもなぜか一人に子供は授かることはなかつた。

その姑も亡くなつてから早や七年が過ぎていた。

静子には、この一〇年間は平凡で何もない結婚生活だと思った。やがて、係りの者が戻つてきて、静子に新しいキャッシュカードを手渡した。静子は必要な分のお金をお金を降ろした。

郵便局を出て、駐輪場に戻つてみると静子の自転車が消えてなくなつていた。

周りを見渡したがどこにもなかつた。

盗まれた。

買ってから六年になる自転車だつた。

他人には盗む価値のあるような自転車には思えなかつた。

他にもきれいな自転車が何事も無かつたかのように無口に並んでいた。

しかし、静子にとつては大事な自転車だつた。買い物には欠かせない足だつた。隣町のスーパーまで歩けばゆうに30分はかかつた。この炎天下の中30分も歩く元気は静子にはなかつた。

静子は、重い気持ちを抱えたまま、スーパーとは反対方向の道を歩き出した。

とぼとぼと歩いていると、地元の商店街が見えてきた。商店街は屋根付きのアーケードがついていて、昼というのに薄暗くぼんやりと口を開けて数少ない客が来るのを待つていた。

暗い口の中では、ところどころ櫛の歯が欠けたように店がたたまれてシャッターがおりていた。

静子は商店街で買い物をしようと歩いてきたが、入り口に立つてみ

るより憂鬱な気分になり、足が踏み出せなかつた。静子は少し先にあるコンビニへ行くことに決めた。

「何だ。今日もコンビニ弁当か」

義雄はうんざりした様子で食卓に並べられたお弁当を見て、いつた。「仕方ないじゃないの。自転車が盗まれちゃつたんだから。そんなにいうのならお昼のお買い物は、車で乗せていつてくださいな」

静子は反発するようにいつた。

義雄は、眉間にしわをよせて

「仕事中だらう。抜けてくるわけにいかないよ」

とつっぱねた。

「あら、以前御義母様がいらした時は、お昼は家で食べてらしたじゃないの。少し早めに戻つてきてお買い物につきあつて下さればそれで良いのですよ」

静子はお茶を入れながら、いつた。

「商店街なら歩いて行ける範囲じゃないか。昔の話というのなら、お前だつて母がいた時はよく一緒に商店街で買い物してたじゃないか」

「あなたは最近あそこの商店街にいつたことないでしょ。今じゃ誰もあんなところにいつたりしないわ。それにだいいち暗くて不気味なんですもの」

そういうえば義雄はここ数年地元の商店街にいつたことはなかつた。休日も妻は、スーパーだ、ショッピングセンターだといつて、車で遠出させられていたことを義雄は思い起こした。

六年前に隣町にスーパーができてからは、妻は自転車で一人で買い物に出かけていた。

その頃からか義雄も商店街に行くことはほとんどなかつた。

「よし、じゃあ今度の休日に一人で商店街にいつてみようか」義雄は妻に提案した。

静子は暫く黙つていたが、

「さつ、『J飯』にしましょつ

とだけいった。

静子と義雄は、だまつて弁当を食べ始めた

何日かして、静子はひとりで地元の商店街に行くことを決した。何年ぶりだろう、商店街で買い物をするのは。お姑さんが亡くなつてから十年。

それ以来この商店街にはいつていない。

久しぶりに歩いてみると、薄気味悪いと思つていた気持ちはなくなり、懐かしい気分になつた。それだけにかつては開いていた店の多くが、シャッターを下ろして閉まつている光景は胸にぐつとくるものがあった。

それでも店を閉じずにがんばつてこじるところもあつた。代替わりをしている店もあつた。

まだ現役でがんばつてている豆腐屋のじいさんもいた。なんだかとても懐かしい。

「よう久しぶり。元気かい」

と声をかけられた。

とても嬉しい気持ちになつた。

代替わりをした店では若大将が、

「ここにちは、鈴木様」

と声をかけてきた。

静子は「あらっ」と声を出した。

隣町のスーパーで魚屋をしているのと同じ若い男がそこに立つていた。

「うちは、元々こちらが本店だったのですけど、今じゃあちらのスーパーで商売をさせて頂いております」

といって若大将はぺこりと頭を下げた。

「店はぼろいんですけど、中味は新鮮ですよ」

といつて、かれいやさんまなどの魚を見せてくれた。

その日、静子は商店街を端から端まで回った。お姑さんと買い物をして歩いた頃を思い出しながら。いくつもの懐かしい顔に会った。帰りに商店街でもらったくじを持って、広場のくじ引き会場へ立ち寄った。

当たった！なんと2等賞。自転車だった。静子は満面に笑みを浮かべて当たった自転車に乗つてもつ一度商店街の中を端から端まで、子供みたいにはしゃいで走つた。

自転車の買い物かごには、商店街で買ったお惣菜やお菓子でいっぱいになつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088f/>

商店街にて

2011年1月5日03時13分発行